
雨降りの日

九十九 一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨降りの日

【Nコード】

N2155T

【作者名】

九十九 一

【あらすじ】

中年夫婦の、少し心が暖まる話。

灰色の空から無数の雨粒が地面に叩きつけられている。

「はぁ、これだから天気予報はあてにならないんだよ」

英夫はぼそりと文句を言った。朝の天気予報では、曇りのち晴れ、降水確率は十パーセントと言っていた。まず雨が降ることはないだろうと決めつけていたので傘は持っていない。

幸い、会社の近くにはコンビニがあるので、ビニール傘を買えば済む。英夫は鞆で、頭が濡れないようにかばいながら、近くのコンビニまで走っていった。二種類置かれていたビニール傘のうちの安い方を手に取り、レジへと持っていった。

傘を開いて、駅までのいつもの道をいつものように歩いた。

ただでさえ人の多い帰宅時の車内だが、この日は雨が降っているせいでじめじめしており、いつも以上の不快感を感じていた。

数十分の間、電車に揺られたのち、最寄り駅に到着した。扉が開いてホームに降りた瞬間、体がひんやりとした空気に包まれ、英夫は心地よく感じた。

駅の改札を出ると、見慣れた顔を発見した。妻の麻子だ。右手には自分の赤い傘を、左手には英夫の紺の傘を持っている。

「……どうしたんだ、こんなところで？」英夫は不思議そうな顔をして尋ねた。今までに麻子が迎えに来るようなことはなかったからだ。

「迎えにきたのよ」

「はははは、どんな風の吹き回しだ？」

英夫は笑っているが、麻子の顔は、どこか寂しそうである。

「やっぱり、覚えてないのね」

「ん、なんのことだい？」

はぁ、と大きなため息を一つ吐いたあと、「二十年目でしょ」と麻子は言ったが、英夫にはなんのことだかさっぱりわかっていない

ようである。麻子は諦めたように「結婚記念日よ」と小さな声で言った。

その言葉は、英夫の胸に突き刺さった。

「そういえばそうだったな。すまない……。もう、長いこと、お祝いでなかったな」

「……早く帰ろう。今日はご馳走を作るから」

麻子が自分の赤い傘を開く。英夫は心苦しくて仕方がなかった。

「そういえば、必要なかったのね、傘」

「……そうだな」

英夫は赤い傘の中に入り、麻子の手をぎゅっと握った。

「いつもありがとう」

これが英夫にできる精一杯だった。

麻子がそっと微笑む。英夫は久しぶりに麻子の笑顔を見た気がした。

二人で一つの傘を差して帰宅した。雨が止まないことを願いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2155t/>

雨降りの日

2011年10月9日01時50分発行